

第8章

コンゴ民主共和国西部農村社会とその土地利用に関する覚書

武内 進一

要約

冷戦後の土地政策に関する研究対象であるコンゴ民主共和国バンドゥンドゥ州北部の調査の一環として、先行研究や予備的調査で得られたデータに基づき、同地の地理的条件、主要居住者であるバテケ人社会の特徴、そして土地利用の実態について整理する。森林とサバンナが混在するこの地域では近年ボノボの生息が確認され、NGOを中心に自然保護と開発の試みが実践されてきた。人口密度は依然低く、焼き畑耕作が広く行われている。住民の間に土地不足は認識されていないが、畜産企業が広大な土地を占拠しており、森林は農地へ、またサバンナは住民による小規模な放牧地へと転換が進んでいる。人口希薄、コミュニティの自律、そして政策的介入の少なさを特徴とする地域だが、そうした条件下でも農村の土地利用は急速な変化を遂げている。

キーワード

コンゴ民主共和国 バテケ ボノボ 森林 サバンナ 畜産

はじめに

本研究会の最終報告で筆者は、土地政策の実施過程に着目して、ルワンダとコンゴ民主共和国（以下、DRC と略す）西部地域を比較しながら、制度運用の実態や政策が農村社会に与えたインパクトを検討したいと考えている。ルワンダと DRC 西部を比較する理由は、これら2つの農村地域の性格が対照的であり、アフリカにおける冷戦後の土地政策の影響を比較検討し、あるべき政策の方向性を探るといふ本研究会の関心に照らして興味深い事例を提供するからである。

国レベルの推計値で比較すると、ルワンダの人口密度は平方キロあたり 460 人だが、DRC は 33 人である¹。農村部の人口圧は、両国においてかなり差がある²。また、ルワンダでは 1994 年に「ルワンダ愛国戦線」(Rwandan Patriotic Front: RPF) が政権を獲得し

¹ *World Development Indicators* による 2014 年の推計値。

² DRC の人口密度は都市部を除けば東部で高く西部で低い。DRC では近年人口センサスが行われておらず厳密な比較は困難だが、DRC 西部地域の農村部とルワンダのそれを比較すれば、国レベルの平均値以上に差が大きいと考えるべきであろう。

て以降土地政策が積極的に実施されてきたのに対して、DRC では政治的混乱などの理由から見るべき政策が採られず、農村部はほとんど放置されてきた。ようやく 2000 年代に入って、コミュニティによる森林保有を認める法律が制定されるなど、農村コミュニティの慣習的な権利を認める方向が打ち出されつつある。一方、農村社会の自律性という観点で見れば、DRC 西部の調査地では社会が土地保有をはじめとして国家から強い自律性を持っており、この点でルワンダ農村社会と強い対照性をなしている。最終報告では、こうした相違点を踏まえて両国における農村変容を比較し、政策がもたらしたインパクトの評価や今後採るべき政策の検討を行いたい。

本稿では、その準備作業として、DRC 西部地域で昨年実施した調査をもとに、当該地域の基礎情報を整理する。筆者はルワンダにおいて 15 年以上の調査経験を持ち、土地問題に関する成果も公表してきたが (Takeuchi and Marara 2014; 2011; 2009)、DRC 農村部における調査の実績はほとんどない。しかし、幸い 2015 年 9 月に DRC 西部地域において 2 週間程度の農村調査を実施することができた。調査は予備的なものに過ぎないが、この機会に当該地域に関する基礎情報をまとめ、最終年度に向けた論点整理につなげたい。本稿はそのための作業である。

調査は、バンドゥンドゥ州 (Province de Bandundu) プラトー県 (District de Plateaux) ボロボ郡 (Territoire de Bolobo) バテケ＝ノール・チーフダム (Chefferie Bateke Nord) に位置するンカラ (Nkala)、ンペル (Mpelu)、ンベ (Mbe)、エンビリマ (Embilima) の 4 つの村 (Localité) で実施した³。この地域で調査を実施することになったのは、ボノボの保護に関わる研究プロジェクトの予備調査に参加する機会を得たからである。霊長類学を専門とする伊谷原一教授 (京都大学) を中心とする研究グループに加わり、2015 年 8 月～9 月にかけて現地に滞在した。この地域はボノボ生息地の南限にあたり、2000 年代半ばから国際 NGO の WWF が基地を設置して観察と住民支援を実施している。この研究チームに参加することで、予備調査が可能になった。

以下、本稿では、自然環境をはじめとする調査地の地理的特質を述べたのち、当該地域の主要な居住者であるバテケ (Bateke) 人について簡単に説明する。そのうえで、今回の調査によって明らかになった点を、特に 1) 政治権力とその継承、2) 土地利用、3) 開発に向けた取り組み、の 3 点を中心に記述したい。

第 1 節 地理的特質

³ 行政区分は、Ministère de l'Enseignement supérieur, universitaire et de la recherche scientifique (2014) に従って記述した。しかし、DRC では、2015 年に地方分権政策の実施が宣言され、州が分割され、県が廃止されることになっている。この地域は、バンドゥンドゥ州を分割してできるマイ・ンドンベ州 (Province de Mai Ndombe) に含まれる予定であるが、新行政区分についてはまだ十分に確認できていない。

調査地域はバンドゥンドゥ州北部に当たり、首都キンシャサから直線で 300km 弱の距離に位置する。しかし、キンシャサとの間の道路インフラはきわめて劣悪であり、当地まで自動車で来ようとすれば 2~3 日を要する。今回の調査時に調査地からマイ・ンドンベ (Mai Ndombe) 県クトゥ (Kutu) 郡の中堅都市ニオキ (Nioki) を訪問する機会を得たが、走行距離約 250km の道を走るのに約 8 時間を要した。キンシャサに行くためには更なる悪路を走り、何本かの河川を渡し船で越えなければならない。

バテケ=ノール・チーフダムは、その名の通りバテケ人が主要なエスニック集団である。バテケ=ノールとは「北バテケ」の意味であり、「南バテケ」を意味するバテケ=シュッド (Bateke-Sud) ・チーフダムは、南側のムシエ郡 (Territoire de Mushie) に位置する。「チーフダム」は植民地期から続く地方行政機構であり、もともとは社会的凝集力が比較的強い集団に対応する行政単位として設置された (武内 2015: 178)。その名が示すように、このチーフダムに居住する主要エスニック集団はバテケ人である。ただし、隣接するチーフダムに名前を冠されているバボマ (Baboma) 人をはじめ⁴、バテンデ (Batende) 人やバナヌ (Banunu) 人など、多様な人びとが居住する。例えば、2015 年の調査時に訪問した村のひとつであるンバンジ (Mbandji) は、北部エカトゥール州を主たる居住地とするボンガンド人が主に居住するが、彼らは 1980 年代以降にこの地域に移動してきたという。とはいえ、チーフダム全体で見れば、バテケ人が最大のエスニック集団であることは疑いない。バテケ人については、次節で改めて先行研究を検討し、社会構造について簡単に整理する。

この地域の自然地理的条件について、Ghys (1934) に従ってまとめておく。「バテケ、バテンデ、バボマ地域の農業調査」と題されたこの報告は、コンゴ川、ンフィミ (Mfimi) 川、カサイ (Kasai) 川に挟まれた南緯 2~4 度、東経 16~18 度の領域を対象にした調査であり (p.114)、これはおおよそ今日のボロボ郡とその東隣のクワムト郡 (Territorie de Kwamouth) を中心とする領域と考えてよい。植民地期の 1930 年代に実施された調査だが、自然地理的条件に関しては大きな変化は想定しなくてよいであろう。

同報告によれば、この地域は乾季と雨季の区別があり、だいたい 10 月から 5 月頃が雨季となる。年間降雨量は 1500mm 程度で、4~5 月と 10~11 月頃の雨量が最大となる⁵。標高は西部のバテケ人居住域が最も高く 500 メートル程度である。調査対象地域のなかでバテケ人居住地域は比較的起伏に富んでおり、その北部や、バテケ人居住地域の

⁴ バテケ=ノール・チーフダムの東側にバボマ=ノール (Baboma-Nord) ・チーフダムが位置する。

⁵ 降雨量については、ニオキ (Nioki) に設置された観測所で得られた 1929~1932 年のデータが掲載されている。それぞれ 1441.2mm、1402.8mm、1444.8mm、1608.5mm であった (Ghys 1934: 115)。

東部に位置するバボマ人居住地域や北部はよりなだらかである。土壌はほぼ全域にわたり砂質と粘土質が卓越している。サバンナと回廊林 (*galeries forestière*)⁶がパッチ状に混在する植生だが、地味は樹林地帯の方が豊かである。Ghy (1934)では植生に関して、サバンナと回廊林をさらに下位区分している (pp.119-121)。すなわち、サバンナについては、a) 草地サバンナ、b) サバンナ・ウッドランド⁷、c) ウチワヤシの卓越したサバンナ (*savanes à Borassus*) の3つ、回廊林部については、a) 地面が乾燥した通常の森林、b) 季節により浸水する森林、湿地林、c) 二次林の3つである。本調査地においても、おおむねこうした植生を観察することができた。

第2節 バテケ人社会

調査村における主要エスニック集団はバテケ人である。したがって、調査地社会の基本構造を理解するために、バテケ人に関する先行研究を参照することが不可欠である。以下では、主として Vansina (1973)に依拠しつつ、バテケ人社会の基本的特質を整理したい。ヴァンシナは著名なアフリカ史研究者で、この著作も歴史研究のようなタイトルを冠しているが、内容は社会構造についての詳細な調査が含まれ、バテケ社会を理解するための必読文献の一つである⁸。なお、バテケという名はキコンゴ (*Kikongo*) 語で「マココ (*Makoko*)⁹の名によって知られた王国に帰属する住民」を指しており、他称である¹⁰。テケという音は、住民の自称である *Te(g)e, Tsio, Tio, Teo* といった語が変形したものと考えられている (Vansina 1973, 8)。自称と他称の食い違いは、この地域に居住する人びとが集権的な政治権力を持たなかったことを意味するのであろう。

バテケ人の居住地の中心は「バテケ台地」(*Bateke Plateaux*) と呼ばれるコンゴ共和国中部であり、ンベ (*Mbe*) が王国の首都である¹¹。ヴァンシナはこのバテケ人の中心地域に住む人々を指してティオ (*Tio*) という名称を用いている。Sautter (1966)のタイトル

⁶ サバンナの水流、水脈に沿って帯状に密生する樹林を指す。

⁷ *Savanes arborées* をさしあたり「サバンナ・ウッドランド」と訳した。

⁸ バテケ人に関する近年の民族誌研究として、Dupré et Pinçon (1997)がある。これは、植民地化以前にバテケ社会で広く営まれていた製鉄に焦点を当てている。その他、地理学の視点でこの地域を扱った大部の研究として、Sautter (1966)が挙げられる。これはガボンとコンゴ共和国全域にわたる調査を踏まえたもので、バテケ人の中心的居住域であるコンゴ共和国中部について詳細な記述がある一方、DRC 側は研究対象から外れている。

⁹ バテケの王を指す「マココ」、「モココ」(*Mokoko*) はそれぞれヴィリ (*Vili*) 語、コンゴ (*Kongo*) 語であり、テケ語で「王」を指す語 *ökoo* の変形である (Vansina 1973, 8)。

¹⁰ その他、*Anzique, Pombo, Anzicana, Chiquoco* などの他称も存在した (Dupré et Pinçon 1997, 19)。

¹¹ ここで言うンベは、コンゴ共和国の首都ブラザヴィルの北方に位置する小都市を指す。正確には、バテケにおいて *Mbe* は「チーフの町」を意味し、後述するようにコンゴ川左岸においてもチーフダムの事務所が置かれる村には「ンベ」の名が与えられている。

に示されるように、この地域は総じて人口希薄であり、人びとは頻繁に移動した¹²。加えて、バテケは活発な商業活動に従事することでも知られていた。現在左岸にコンゴ民主共和国の首都キンシャサ、右岸にコンゴ共和国の首都ブラザヴィルが位置するマレボ・プール (Malebo Pool) は、植民地化以前からコンゴ川上流域と大西洋交易を繋ぐ物流の結節点であった。この地域に住む人々は、沿岸部のコンゴ (Kongo) 人やコンゴ川上流域のボバンギ (Bobangi) 人などを介してマレボ・プールに持ち込まれる商品を移動しながら売買した。結果的に、マレボ・プール以北のコンゴ川右岸 (西側) を中心に居住する人びとが、他民族特にヨーロッパ人からバテケと呼ばれるようになったのである。ティオは、そのなかでも現在のコンゴ共和国プール州北部地域に居住する人びとを指す。一方、我々の調査地が位置するコンゴ川の東側 (コンゴ民主共和国バンドゥンドゥ州北部) は、バテケ人居住域のなかでは周縁部である。この地域は、ンゲ (Nge) あるいはンゲンゲ (Ngenge) と呼ばれる。言語的には同じテケ語を話す、ンベ近郊の人びとの語彙と比べて9割程度の一致度である。その政治指導者は、ティオと同じく「王」 (*ōkoo*) の称号を持ち、*ōkoo Nge(nge)* と呼ばれる (Vansina 1973, 372)。ティオとは緩やかな同盟関係にあったとされるが、かなりの程度自律的であったと見てよい。ただし、ンゲにおいても中心地にンベの名称が与えられるなど、人びとは自らがバテケであるとの認識を強く持っている。ヴァンシナはンゲについて、バテケの一部と見なしてよいものの社会や文化についてほとんど知られていないと述べ、ティオに関する知見がそのままバテケの周縁部で有効だと考えるべきでないとしている (Vansina 1973, 13)。我々の主たる関心はコンゴ川左岸 (東側) のンゲにあるが、一定の限界を踏まえておけば、ヴァンシナの研究を整理することは調査地社会を理解するために有意義であろう。

1. 親族関係

親族集団に関して2つの重要な概念がある。母系を意味する「ンゾ」 (*ndzo*) と双系を意味する「イブウル」 (*ibuuru*) である。ンゾには家 (house) の意味があり、共通の先祖から母系ラインを通じて繋がる人びとの集団を指す。母系リネッジの世代深度は決まっておらず、数世代で分裂することもある。リネッジには指導者がおり、逆に言えば、指導者を持つ集団がリネッジとしてのまとまりと見なしうる。指導者は「ンフォ・アンゾ」 (*mpfō andzo: chiefs of the house*) もしくは「ンガンゾ」 (*ngandzo: owners of the house*) と呼ばれ、リネッジ内の年長男性が務める。ただし、指導者は母系出自に従って継承されるとは限らず、現指導者の息子が後を継ぐこともある。一方イブウルはあらゆる血縁

¹² Dupré et Pinçon (1997, 24)によれば、ガボン、コンゴ共和国、コンゴ民主共和国にまたがる約12万平方キロの領域におよそ15万人のバテケ人が居住しているという。単純に計算すれば、平方キロあたり1人強の人口密度である。

関係の繋がりを含む概念であり、二者間で血縁的繋がりの近さを強調する際などに用いられる。バテケには食物忌避があるが、それによって明確なグルーピングをすることはできない。集団形成原理としては、母系原理が卓越するというより、それが双系原理と混じり合っていると見える (Vansina 1973, 37)。政治権力の継承についても、相続についても、厳密な母系制を取るわけではなく、母系と父系が混じった実践が行われている。

居住集団は「ウラ」(*ula*)と呼ばれる。ここには核家族、複婚家族、拡大家族、村落といった概念が全て含まれ、語彙のうえでは区別されない。すなわち、ウラは母系出自集団で構成されることもあれば、それだけでなく様々な集団から構成されることもある。複婚はごく普通にみられるが、3人以上の妻を持つ者はまれである。居住地は多くの場合森林の縁辺に建設される。アブラヤシの木が多く植えられていることから、遠方からも判別できることが多い。その人口規模はまちまちだが、ヘッドマン (*wookuru*) ひとりあたり多くても数百人程度である。ヘッドマンは拡大家族やそれに基づくウラの長であり、長老である¹³。ウラを代表し、その中の紛争を調停するのは彼である。また彼は、村を保護する呪力を有するとされ、「ンキイニ」(*nkiini*) と呼ばれる祭壇を設置する。

2. 生業活動

生業活動としては、農業、漁労、狩猟、採集が中心である。農業に関してヴァンシナは、畑のタイプを、サバンナでキャッサバや落花生を植え付け女性が主として労働する「ンチオ」(*ncio*)、森を開墾してトウモロコシやタバコを植え付け男性が主に働く「ングウヌ」(*ngwuunu*)、自宅近くでプランテンバナナなどを植える「イブウォ」(*ibwō*)、裏庭でンチオに植えた作物を小規模に植えるイジア (*idzia*) の4つに分けている。ここで、ンチオが主たる畑だと述べられているが (Vansina 1973, 114)、これは筆者の観察とは異なる。現在では、主たる農作物はサバンナではなく森林を伐採し、火入れして造成する畑に植え付けられる。なお、ンチオとングウヌには所有権に関わる違いがあり、前者は休憩すると所有権が消滅するが、後者ではたとえ休憩しても消滅しない。ただ、いずれの畑についても、開墾に際してヘッドマンなどの許可は必要でない。ヴァンシナは、これは人口密度が低いという理由だけでなく、狩猟に比べて農業への関心が薄いためだと分析している (Vansina 1973, 116)。

伝統的な狩猟の方法は、網と槍を用いて集団で行うものである。この種の猟において、主たる獲物はアンティロープである。鉄砲の流入とともに、単独で行動したり、大型獣

¹³ ヴァンシナのいうヘッドマンがランドチーフとどのような関係にあるのかは不明である。今回の調査村においては、チーフダムの中心地であるンベを除き、村落の長としては、ランドチーフとロカリテの長の2人が挙げられるが、彼らがここというヘッドマンとどのような関係にあるのかについても、今後検討する必要がある。

を仕留めることができるようになった。ゾウやバッファロー、大型のレイヨウ類がこうした獵の対象となる。サル類は竹の先に鉄製の矢じりを付けた弓矢によって仕留めたと述べられているが (Vansina 1973, 123)、獵銃の流入に伴って狩猟量が格段に増加したことは疑いない。畏獵もさかんであり、ゾウも畏で捕らえていたようである。

狩猟は政治構造と密接な結びつきがあり、他のランドチーフ(一定領域に権限を持つチーフ。後述)の土地で行うことは禁止されていた。畏獵であれ、集団の狩猟であれ、政治的忠誠を示すことで初めて許可されるものであり、仕留めた獲物の一部をチーフに献上することが求められた。他のランドチーフの土地で狩猟することは、戦争の原因にもなる重大な違法行為だった。また、狩りによって傷ついた動物が他のランドチーフの領域で死んだ場合、双方のランドチーフに獲物の一部を献上することなど、狩猟をめぐる詳細な規範が存在していた。

その他の生業活動として、製鉄、土器づくり、ラフィア織物などが分析されている (Vansina 1973, Chapter VI)。バテケの居住地域には鉄鉱石が広く産出し、非常に古くから製鉄が実践されてきた。放射線炭素測定によれば、紀元転換期頃の製鉄の痕跡が確認されており、15~16世紀頃には現コンゴ共和国中部のジャンバラ (Djambala) 台地などで活発に製鉄が行われた。当時ポルトガルと交易関係を有していたコンゴ (Kongo) 王国はテケから鉄を輸入していた (Dupré et Pinçon 1997, 45-51)。鍛冶工は「火を操る主、宝石の作り手」として尊敬され、王権と結びついていた (Vansina 1973, 142)。しかし、テケの製鉄業はヨーロッパからの鉄製品流入が本格化すると、競合できず衰退した (Vansina 1973, 267)。1880年代にヨーロッパ人探検家がテケの地にやって来た時、製鉄業はすでに放棄されていたという (Dupré et Pinçon 1997, 56)。粘土をこねて素焼きし、つぼや皿を作る技術は広く女性によって行われていた。しかし、製鉄や土器づくりは植民地期以降衰退してしまう。一方、ラフィアヤシによる織物は、ござや衣類、また家屋など広く用いられ、今日もごく普通に見ることができる。

3. 政治システム：ランドチーフとロード

政治構造に関してヴァンシナは、王の下位に位置する領域的区分を伴う政治権力としては、ランドチーフ(*ngántsii*)¹⁴が唯一の存在だと述べ、訳語に *squire* を当てている。ランドチーフは当該領域内の土地に権威を及ぼし、それに対する権利を主張する。一方、必ずしも領域的区分と対応しない政治権力があるとして、これに *chief-of-the-crown* あるいは *lord* の訳語を当てている。これに対応するテケ語ははっきりしない¹⁵。本稿では、

¹⁴ Vansina (1973)の表記。Dupré et Pinçon (1997)では *nga ntsié* と表記される。

¹⁵ 筆者は、Dupré et Pinçon (1997)のなかで *Lord* に対応する役職の説明を見つけないことができなかった。生産、採集、家内工業、商業の主であるランドチーフとは異なり、生命、健

ヴァンシナが言う *squire* にはランドチーフ、*lord* にはロードという日本語を当てる。ランドチーフは今日も明確に存在するが、ロードは明確な形では存在しない。現在のバテケ＝ノール・チーフダムの中のステータスはロードと関係している可能性があるが、今回の調査では情報を得ることができなかった。

ランドチーフが統治する領域は、草原に浮かぶ森の組み合わせに喩えられる。森にはそれぞれ名前があり、一つないし複数の森と周辺のサバンナからランドチーフの領域が構成される。その境界線は、厳密にはないものの人々から認知されている。ランドチーフがある領域に権限を持つのは、その地の精霊「ンキラ」*nkira* に対する支配力を持つからだと考えられている。精霊は住民を保護し、ランドチーフの統治を成功させる。精霊への信仰は様々な制度によって支えられており、ランドチーフは自分の庭に精霊のための小さな家屋を建設する。彼は精霊を通じて自らの領域を守る役割を持ち、狩人を儀礼的に祝福する。この権威を背景として、村落内で起こる揉め事の仲裁をすることも彼の重要な仕事である。また、バテケの王に対する貢納を住民から徴収することも彼の役割である。

ヴァンシナによれば、ランドチーフが身にまとう標章は厳密に決められているわけではなく、銅の腕輪や足首飾り、ヒョウの歯やビーズでできた首飾り、バッファローの尻尾でできたハエ追い、長い鉄製のパイプなどがあるが、赤色の身にまとう布は高貴さを示し、広く用いられる (Vansina 1973, 318)。今日、何であれ赤い色の衣類はランドチーフの正式な服装として浸透している。

ランドチーフは「権威を持つ家系の者」(*baamukaana lilimpu*) と呼ばれる特定の家系から選出される。これは貴族の家柄であり、平民や奴隷とは異なる。ただし、貴族と平民の区別は明確でないとも言われる (Vansina 1973, 321)。バテケはそれほど階層性の強い社会ではないように思われる。バテケの親族集団は母系制原理を通じて構成されるが、ランドチーフの継承は必ずしも母系によらない。父からその兄弟に母系原理に従って継承された後、息子へと父系原理を使って継承されることもある。また、所有する富や人望、能力もランドチーフの継承者を決める重要な要素であり、これらを考慮しつつ有資格者の中から選定される。この指摘は、後述するフィールド調査での聞き取り内容とも一致する。

一方ロードは、ランドチーフや他のロードを支配する。彼の権限は領域的に定まっておらず、貢納を提供する人々の数は変化する。ロードがランドチーフを兼ねることもある。ロードの権威は、魔力を持つ箱「ンコビ」(*nkobi*) の強さによって決まる。ンコビは様々な呪物が入った箱だが、もともとは精霊から贈られたものとされ、中身は秘密である。箱は精霊を具現化したものであり、ランドチーフにとってのンキラと同じく、精

康、多産の主として *nga baté* が挙げられているが (p.187)、これは明らかに Vansina (1973) のロードと同じものではない。この点に関しては、今後検討を続けたい。

霊の持つ力がロードの権威の源泉となる。バテケの王が国全体に権威を持つ「ンクウェ・ンバリ」(Nkwe Mbali) と呼ばれる精霊から権威を得ているのも同じ論理である。強力なンコビはその名とともに広く知られ、そうしたンコビを持つロードが強い権威と支配力を獲得するとされる¹⁶。

ヴァンシナは、政治権力の正当性がンコビをめぐるイデオロギーで支えられていることについて、権力政治の公認であり、結果として政治的不安定性を惹起しやすいと指摘している (Vansina 1973, 328, 330)。これは、強力なンコビを持つ人が強い権威を持つのか、強い権威を持てばその人のンコビは強いと理解されるのかが曖昧であり、権力政治を抑制する論理が内在していないからである。ロードの継承に際しての競合はランドチーフの場合以上に苛烈であり、後継者が決まりにくいと指摘されている (Vansina 1973, p.337)。領域的実体を背景に持つランドチーフと異なり、ロードと彼の臣民との権利義務関係はあまり明確ではなく、それだけに継承に際して権力政治の側面がより表出しやすいのであろう。

4. 王国

ティオはバテケの中心部であり、概ね北をアリマ (Alima) 川、東をコンゴ川、南をジュエ (Djoué) 川で挟まれたコンゴ川右岸部 (現コンゴ共和国プール州北部) を指す。ジュエ川がコンゴ川に注ぎ込む場所がマレボ・プールの西の端であり、そこから下流は浅瀬や急流が続いて船舶での航行が不可能となる。ティオにおいて「王」(ōkoo) の称号を得ているのは一人だけであり、「王の都」(Mbe) に居住する。フランスの探検隊を率いたドゥ・ブラザ (Pierre Savorgnan de Brazza) がバテケの王と保護条約を結び、植民地化に道を開いたのは 1880 年であったが、この時王の名はイロオ (Iloo) といった。ドゥ・ブラザはイロオを「バテケの王」(Makoko) であり、マレボ・プール周辺地域の支配者であるとして条約を結び、植民地化の根拠とした。ただし、イロオはティオのなかでは「王」の称号を独占していたものの、ティオの外部にもバテケは居住していたし、例えばンゲングにおいても「王」を名乗る者がいた。また、イロオの支配がどの程度実効性を伴っていたのかについても、慎重な検討が必要である。以下、王国の統治について整理する。

王が王たる所以は、国全体を統治するンキラである「ンクウェ・ンバリ」の主人 (master) であることによる。ンクウェ・ンバリは「ライオンの宮廷」(the court of the lion) を意味する男性の精霊で、レフィニ (Lefini) 川の滝に住む。ランドチーフがそれぞれのン

¹⁶ ヴァンシナの記述から考える限り、ロードとは、ランドチーフとして特定地域を領域的に支配するだけでなく、強力なンコビを通じて当該領域外にも権勢を広め、貢納を獲得することに成功した者と理解できる。

キラを通じて特定領域を「支配」するのと同じ意味で、王はンクウェ・ンバリを通じて国全体を「支配」する。この場合の「国」はおおよそ上記の地理的領域に対応しており、イロオはティオの王であるものの、ンゲなどを含めたバテケ全体の王とは言えない。また、この王権は軍事力など物理的強制力に基づくものではない。ヴァンシナは、ティオの王が軍事力や経済力など世俗的な権力をほとんど持たず、ンクウェ・ンバリの主であるという呪術的な力を権威の根拠にしている点について、「バテケのローマ教皇」との比喻を用いて説明している (Vansina 1973, 378)。世俗的な権力は各地のロードに分散されていたわけである。前述のように、ロードの力は彼らが有するンコビの強さとして認識され、そこでは苛烈な権力政治が展開していた。ティオ王国の政治秩序を規定するイデオロギーとして、王権に由来するものとロードのンコビの強さに由来するものが併存していたのである (Vansina 1973, 384)。

王は統治領域から貢納を集めた。これはランドチーフからロードを通じて、最強のロードで貢納収集の責任者であった「ンゲイリイノ」(Ngeiliino)¹⁷のところに集められた。貢納の際、ランドチーフやロードは収集した量の半分を取り置き、奴隷の購入、婚資、家臣への贈与など、自らのために利用した。末端のランドチーフから王に至る貢納の流れ(貢納先)は建前としては決められていたが、現実には可変的であり、末端のランドチーフはロードの権勢の強弱を考慮して貢納先を選択した (Vansina 1973, 399)。また、ティオの王に貢納する領域そのものも、時代によって変化した。コンゴ川の東側のンゲングではその首都(Mbe)に住む彼らの「王」に対して貢納したが、ティオの王にも貢納していたかどうかは不明である。ンゲングの人々はバテケ意識を持っていたとはいえ自律性が強く、コンゴ川の西側への貢納の内容は時代によって異なると考えるべきであろう¹⁸。

右岸の首都ンベには王が主宰する裁判所があったが、王国全体としての軍はなく、それぞれのチーフが軍事力を保有した。王が軍事力を必要とするときは、首都近くのロードが提供した (Vansina 1973, 391)。世俗的な権力という意味では、王が最強というわけではなかった。総じて、人口集積地のそれぞれが一定の政治的権力を有しており、この点で王国の統治はきわめて分散的であった。経済的にも、王ではなく、市場を支配したチーフが豊かになったのである (Vansina 1973, 397)。

5. 交易

¹⁷ ロードの中で筆頭に位置する官職名。レフィニ川南部を支配した (Vansina 1973, 372)。

¹⁸ レオポルド II 世が設立し、コンゴ自由国の建設に際して決定的な役割を果たした国際アフリカ協会 (International African Association) は、現コンゴ共和国側のバテケの王権はコンゴ川右岸(西側)に留まると主張し、ンゲングに対する権威を認めなかった。これに対してフランス側は、コンゴ共和国側のバテケの王権を拡大解釈しようとした (Vansina 1973, 396)。

先述したように、バテケ人は大西洋交易とコンゴ川交易の結節点に位置し、両者をつなぐ商人として特に19世紀に活躍した。1880年代まで、この交易の主軸は、内陸からもたらされる象牙と沿岸部からもたらされるヨーロッパ製品との交換であった。内陸部からの商品としては、他にヤシ油や落花生に対する需要もあった。奴隷はこの時期まだマレボ・プールに持ち込まれていたが、大西洋交易の輸出品としての重要性は失っており¹⁹、周辺のアフリカ人社会で吸収された。当時は労働市場が成立しておらず、奴隷の売買は労働力調達手段として重要な意味を持っていたため、奴隷交易はティオのチーフによって直接管理された (Vansina 1973, 277)。これらの商品に加えて、キャッサバや落花生、魚など食料も取引され、遠距離交易を下支えした。

当時、バテケ人居住域には3つの交易センターが存在した。最大のものは言うまでもなくマレボ・プールだが、その他にも西部にラアディ(Laadi)、東部にンツェイ(Ntsei)ないしボロボ(Bolobo)があった (Vansina 1973, 251)。ラアディは地図で見ると (Vansina 1973, 10)、現コンゴ共和国レクム(Lékoumou)州北部に位置する。ンツェイは現コンゴ共和国プラトー州東部のコンゴ川に近い地域にあり、ボロボはコンゴ民主共和国側でコンゴ川沿いの町、我々の調査地が位置するボロボ郡の中心地である。これら3つの交易センターはいずれもバテケ人居住域の縁辺に位置し、他の民族が遠方から持ち込む商品との交換が行われていたと考えられる。

具体的な商品を挙げると、大西洋沿岸部から持ち込まれるものとしては、ヨーロッパ製衣類、銃、火薬、陶器、鏡、ビーズ玉、貝殻、ろうそく、真鍮(原料および製品)、鉄製品、塩、奴隷などがあった。内陸部の産品としては、象牙、落花生、奴隷、ラフィア、ヤギ、ニワトリ、ブッシュミート(特にバッファローのもの)、タバコ、ゴム、食料(キャッサバ、トウモロコシ、トウモロコシ・ビール、バナナなど)、籠細工などがあった。西部のククヤ(Koukouya)台地からの商品は、銑鉄、鉄製品、木製ドラム、土器、ヒョウの皮などがあった。コンゴ川上流域からボバンギが持ち込む商品としては、燻製魚、土器、カヌー、漁撈用具、鉄製品、むしろ、ヤシ油、奴隷、カムウッド(木材)、コパールなどが挙げられる (Vansina 1973, 265-266)。

第3節 調査地農村の特質

調査地周辺の地理的特徴、そして主要な居住エスニック集団であるバテケ人に関する一般的記述を踏まえて、本節では調査地農村の特質を主として社会経済的側面からまと

¹⁹ 18世紀末から19世紀にかけて欧米諸国は次々に奴隷貿易、奴隷制を廃止した。イギリスは1807年に奴隷貿易を廃止し、それ以降英国海軍はそれを監視する任務を負った。アメリカ大陸で最も遅くまで奴隷制を存続させていたブラジルも、1888年に廃止に踏み切った。

めることとする。以下では、この地域の顕著な特徴である森林とボノボの保護について述べた後、経済活動や開発の取り組みを概観する。そしてランドチーフを中心にチーフの役割を概説したうえで、WWFが主導して実施した調査に基づき土地利用について分析する。

1. 森林とボノボの保護

先述した通り、調査地域は森林とサバンナがパッチ状に存在する。2000年代に入り、この地域でボノボの生息が確認された。ボノボの主要な生息地はコンゴ盆地中央部の熱帯雨林であり、乾燥度の高いこの地域に生息することは従来想定されていなかった。しかし、ローカル NGO の MMT (Mbou Mon Tour) がボノボを発見し、国際 NGO の WWF が確認したことで、この地域は一躍脚光を浴びた。MMT の創設者 JB²⁰ はキンシャサで判事の仕事をしているが、調査村の一つンカラのランドチーフの一族であり、この地域に深いコネクションを有する。JB がボノボ保護の重要性を説いた結果、多くのランドチーフが自らの村で保護林を設け、ボノボの保護に取り組むようになった。今日においても、村の土地は基本的にランドチーフに帰属すると認識され、彼らは村落社会に強い影響力を持っている。ランドチーフが主導する保護林の設置に表立って異を唱える者はいなかった。

保護林化の背景として、2点指摘しておきたい。第1に、エコツーリズムのアイデアである。JB は早い段階から、ボノボの保護によってエコツーリズムを呼び込み、地域の開発に繋げる構想を持っていた (Narat et al. 2015, 4)。ボノボの保護に積極的な意義を見いだした JB と MMT の説得が、ランドチーフをはじめとする地域住民の支持を得て保護林化が進んだのである。第2に、2002年森林法²¹である。同法はローカル・コミュニティによる森林コンセッション保持の権利を認め (第22条)、村落などが主体となった共同所有の可能性に道を開いた。同法は関連法整備の遅れのために未だ施行されていないが、法律施行を見越して国際 NGO などから様々な働きかけがなされている。この地域においても WWF や MMT が主導し、住民参加による土地利用図の作成事業が進められてきた (後述)。土地利用図作成を通じて地元コミュニティの土地に対する権利や利害の意識を高め、森林資源管理の改善や林業部門のガバナンス強化に繋げようとの取り組みである (Koy Kondjo et Onotamba Kondjo 2011)。

調査対象村落によって時期に多少のずれはあるが、概ねここ10年程度の間に村落の森林の一部を保護林に指定し、トラッカーなど限定された例外を除いて立ち入りを禁止する措置が採られてきた。この措置はランドチーフが主導しており、実効性は高い。ラ

²⁰ 調査地に関わる人名は原則として仮名で記す。

²¹ Loi No.011/2002 du 29 août 2002 portant code forestier en République Démocratique du Congo.

ンドチーフの権威は村人の間で共有されており、その命令は人々にとって遵守すべき規範と考えられている。インタビューで尋ねる限り、ボノボを守るために保護林を設置するという認識は住民に支持されており、保護林への立ち入り禁止措置も相当程度守られていると考えてよい。ただし住民に不満がないわけではない。住民の中には、保護林の設置にあたって住民の意見が聴取されることはなく、ランドチーフを中心とする一部有力者の独断で決められたと述べる者もあった²²。また、近くの森林が保護されているので、畑を遠くに作らねばならないという不満も聞かれた²³。

2. 村落経済と開発

調査地の生業で圧倒的に重要なのは農業であり、住民のほとんどは農業に従事している。農業は主として自給用生産に向けられている。道路インフラが劣悪であるため、商人が農産物の買い付けにやってくることもあまりなく、時折住民が自転車でチュンビリなど近隣の市場に販売に行く程度である。先行研究が指摘するとおり（Ghys 1934; Vansina 1973）、主要な農作物はキャッサバや落花生で、主食としてはキャッサバへの依存が極めて高い。土地不足は顕在化しておらず、住民はランドチーフに断ることなく森林に畑を開くことができるので、主食に関しては十分な生産が可能である。一方、資源の減少により漁撈や狩猟では十分な収穫があげられず、聞き取りの際、住民は口々に不満を漏らした。漁労は主として女性の仕事だが、漁獲高は減少傾向にあるという。野生動物もすでに希少であり、保護林設置の影響もあるのか、そもそも猟銃を所有して狩猟を行う人がそれほど多くない印象を受けた。狩りで大きな獲物を得た場合には、近隣の街に売りに出かけることが多いようだ。聞き取りでは、「キャッサバはあるが、おかずとして一緒に食べるものがない」という不平をしばしば耳にした。

この地域でそれ以外の特筆すべき産業としては、先述した牧畜が挙げられる。巨大な畜産企業の存在と並んで、住民の一部が土地を囲い込みウシやヤギの牧畜を始めたことで、村落経済においても畜産の重要性を増しつつある。現在のところ、村人の畜産は小規模であり、それが経済格差を構造化するようなものとは思えない。しかし、通常は使われないサバンナとはいえ、土地囲い込みの影響は無視できないであろう。この点は、後にデータを用いて改めて検討する。

給与所得者の存在についても説明しておこう。調査地で確認できた給与所得者には3つのタイプがある。第1に、教師である。村にはおおむね小学校があり、ンベには中等学校も存在する。そのため複数の教師が村に住んでおり、彼らは定期的に給与を得てい

²² 2015年9月12日エンビリマでの聞き取り。

²³ 2015年9月7日ンカラでの聞き取り。

た。これは教師には給与を現金で支給する仕組みがあるため、月 100US ドル程度の賃金が支払われていた²⁴。第 2 に、トラッカーである。これはボノボの行動を日常的に観察する仕事で、自然保護活動の実施とともに WWF や MMT が村人数人を雇用するようになった。今回の調査では、ンカラとンペルの 2 村で 6 名のトラッカーから話を聞くことができた。給与水準は 30US ドル～150US ドル程度である²⁵。第 3 に、畜産会社の従業員である。畜産企業である SEBO (Société d'Élevage Bandundu ouest) はウシの世話をする従業員を大量に雇用しており、広大な牧場のなかに作業場と住居を建設している。こうした形で畜産企業に雇用された経験を持つ人は、調査村でもかなりの数に上る²⁶。彼らは仕事を辞めて村に戻っており、今日畜産企業から給与を得ているわけではない。しかし、特に若年層にあつては、村での暮らしと外部社会での雇用を繰り返していると考えられ、その中で畜産企業での就労は重要な意味を持つと言えよう。

その他の給与所得者はほとんど存在しない。ある程度の規模の村には診療室 (poste de santé) が置かれ、そこに国家資格を持った担当者がいる。これら担当者は規定の教育機関を修了してこのポストに就いている²⁷。しかし、診療室に予算が配布されるわけではなく、この担当者も「危険地手当」(prime de risque) の 9000 フラン (約 9US ドル) を毎月受け取るが、公務員ではないとのことである。なお、ランドチーフもロカリテ長 (Chef de Localité) ²⁸も公務員ではなく、給与は支給されない。チーフダムの事務所が置かれているンベには、そのチーフをはじめ公務員が何人かいるであろう。ただし、給与が定期的に支払われているかは定かではない。ニオキ市で市長 (Chef de cité) に話を聞いた際、予算は予定額の 5～10%しか執行されず、市には自分を含め 10 数人の職員がいるが 2008 年以來給与の遅配・無配が続いているとのことであった²⁹。

上述したとおり、MMT にはボノボを利用して地域開発を進めたいとの構想がある。

²⁴ 調査時に訪問したニオキで、偶然ホテルで農村に住む教師に賃金を運ぶ人びとと話す機会を得た。ただし、これが関係省庁で制度化されたものなのか、援助の一環で期限付きの仕組みなのかは確認できていない。

²⁵ MMT に雇用されているトラッカーは 30～70 ドル、WWF のトラッカーは 147 ドル (班長の場合 10 ドル増しになる) であった。MMT 関係者は、支援団体が援助を打ち切ったために給与削減を余儀なくされたと説明していた。

²⁶ 例えば、ンカラのチーフは若い頃畜産会社に勤め、キャピタ (capita) と呼ばれる職にあった。キャピタとは、3 つほどの牛群の責任者を指す (2015 年 9 月 2 日 MB への聞き取り)。

²⁷ ンカラの診療室担当者の場合、次のような経歴を持つ。1997 年に中学校を修了して教員資格を取り、1998～2001 年にチュンビリに近い村で教員の仕事をした。2002～07 年にバンドゥン市 (同州の州都) にある医療技術高等学院 (Institut Supérieur de Technique Médical: ISTEM) で学び、その後看護師として働いた。その後、故郷の医療状況を改善したいと考え、出身地のンカラに戻ってきたという (2015 年 9 月 7 日 MF への聞き取り)。

²⁸ 末端行政単位である村 (ロカリテ) で行政上の役割を司る役職。後述する。

²⁹ 2015 年 9 月 4 日聞き取り。

WWFも基本的にその構想を支持し、協力している³⁰。WWFはこの地域に調査基地を建設するなど、国際NGOのなかでは最も早くから関与し、資源も投入しているが、現在その他にも多くの機関が参入している。宿泊施設の入口に建てられたMMTの看板には、WWFを含めて十数の国際NGOのロゴマークが並んでいる。これらNGOはMMTを支援し、資金援助を行っている。その支援は地域開発にも向けられており、MMTはこの地域で様々な小規模開発プロジェクトを実施している。また、MMT以外のNGOが開発プロジェクトを実施するケースもあるようだ。聞き取りのなかで、植林、小規模畜産（ブタ、ヤギ等）、魚の養殖、製粉機械の導入といった事業が実施されてきたことがわかった。ただし、現在までのところ、こうした開発プロジェクトの成果は芳しいとは言えないようである。この点、MMTも他のNGOもそして住民側も、それぞれに言い分があるようだが、結果を総括し、うまくいかなかったのであればその理由を精査する必要がある。

3. ランドチーフ

村には原則として1名のランドチーフがおり、村の土地はこのランドチーフに帰属すると考えられている。村落の土地を形式的に所有するランドチーフは、村の政治の中心でもある。ただし、政治権力を彼が独占するわけではなく、何人かの長老と相談しつつ必要な意思決定を行う。また、彼とは別にロカリテ長という役職があり、これが地方行政上は村を代表する役職となっている。ただし、ロカリテ長に土地権利を差配する能力はなく、上位の行政権力に対する窓口のような位置づけである。

調査した4カ村のうち、ンベの位置づけは特殊である。「チーフの都」を意味するこの町はバテケ＝ノール・チーフダムを中心地であり、チーフダムの役所が置かれている。この村には4人のランドチーフが住んでいる。すなわち、ンクル（Nkuru）、エングヌ（Engunu）、ンボ・ンボロ（Mpo Mbololo）、モベヤ・ツアル（Mobeya Tsalu）の4カ村のランドチーフである。ンベの村そのものはンクルの領域内に存在する。その他の3カ村の居住者は植民地期にこの地に移住を命じられたという³¹。移住に伴い、当該領域内に住む人はなくなったが、土地に対する権利は依然として保持している。ただし、耕作のために以前の居住地まで通うのは遠いので、ンクルなど近隣の領域で自給用の畑を開くことを認めてもらっている。一般に、自給用の畑はランドチーフにいちいち承認を得

³⁰ ただし、両者の間に潜在的な緊張関係があることも指摘すべきであろう。MMT代表が共著者に加わっているNarat et al. (2015)は、MMT側の立場でWWFとの緊張関係について触れている。

³¹ コンゴ民主共和国（旧ベルギー領コンゴ）に限らないが、人口希薄なアフリカ中央部において、植民地当局はしばしば村落を幹線道路付近へ移動させた。また、交通や物流面での利点を考慮して、アフリカ人が自ら移住することもあった。

ずとも開墾してよいことになっており、距離が近いといった理由で自分の住む村ではなく隣村の森林を開墾することもある。ンクルの領域内で他村の住民が開墾を許されているのも同じ論理である。ここから明らかなように、土地はなお余剰と認識されており、その利用に困難が生じる事態は起こっていない。

バテケ=ノール・チーフダムのチーフは、これら4人のランドチーフではなく、別の家系から選出される。チーフダムのチーフとは今回の滞在では面会できなかった。その選出方法や役割、そして植民地化以前のロードとの関係など、調査すべき点は多数残されている。

一方、ランドチーフの継承に関しては、今回の調査で訪問した4カ村で7人のランドチーフについて継承関係の聞き取りを行った。十分な調査とは言えないが、そこでも母系だけでなく、父系による継承も確認できた。母方オジからオイへという母系の継承が目立つものの、兄から弟へ、また父から息子への継承も存在する。先行研究が指摘する通り、双系での継承と考えてよい。

4. 土地に対する権利

今日のコンゴ民主共和国農村地域に総じて当てはまることだが、調査地域においては土地権利に関する2つの規範が併存している。土地がランドチーフに帰属するというバテケ社会の規範と、公式な土地法に基づく権利の規範である。今日のDRCで有効な土地法は、「財産の一般制度、土地・不動産制度、担保制度に関する1973年7月20日付法律No. 73-021」³²である。同法は、土地所有権が国家に帰属し、土地利用は「恒久的コンセッション」（DRC国籍を持つ個人のみが対象。無期限で相続可能）か「一般的コンセッション」（法人、外国人を対象とし、最長25年で更新可能）の形でのみ可能であると定めている。慣習的な権利下にある土地については、それがやはり国家に帰属するものの、大統領オールドナンスで別途運用を規定すると定められた（第389条）。ただし、このオールドナンスは、今日に至るまで規定されていない。したがって、上記2つの規範のうち、バテケ社会のそれは国法上の根拠を持たない。後者については、上記土地法で規定されたコンセッションの形をとる。

この地域では畜産企業が広大な土地を所有しており、WWFが調査を実施したンベ=ンクル・グループマン（groupement Mbee-Nkuru）³³において畜産企業SEBO社³⁴の所有地

³² Loi no.73-021 du 20 juillet 1973 portant régime général des biens, régime foncier et immobilier, et régime des sûreté. 条文については、武内（2014）参照のこと。

³³ グループマンは、行政機構の一つでロカリテとチーフダムの中間にあたる。ンベ=ンクル・グループマンは、バテケ=ノール・チーフダムの一部を構成する。

³⁴ SEBO社に長く勤め、現在MMTで働くMBから、近年SEBO社はJVL社を買収し、SOGENACと改称したとの説明を受けた（2015年9月2日聞き取り）。この点は十分確認で

は7万2426haに及ぶ(Koy Kondjo et Onotamba Kondjo 2011, 91)。SEBO社はその起源を植民地期に持ち、キンシャサの市場向けに畜産を行ってきた。同社が所有する領域は、ウシの放牧のために鉄条網で囲われている。企業は土地法に基づいてコンセッションを取得しているはずだが、ランドチーフに対しても毎年幾ばくかの支払いを行っている。正式な手続きを経てコンセッションを取得していれば、こうした支払いは本来必要ない。牧場があまりに広大で、住民の間に潜在的な不満が醸成されることを恐れて、こうした措置をとっているのであろう³⁵。

畜産会社の活動の影響のためか、この地域では村人のなかにもサバンナを囲い込んでウシやヤギを飼育するものが増えている。多くは数頭で、あまりうまくいっていないが、かなり広い地域を鉄条網で囲って私有地化している。この場合、正式な手続きを経てコンセッションを取得しているのではなく、ランドチーフに付加的な贈りものをして土地利用を認めてもらっている。付加的な支払いの水準は様々だが、例えばエンビリマ村のBLの場合は、2011年に近くのエバリ(Ebali)村で牧場用地を取得した際、そのランドチーフに6万5000コンゴフラン、塩2袋、2USドル、そして毛布を渡したという³⁶。こうした形で個人的な放牧地を取得する事例は、今日決して珍しくない。

今回の調査において、個人で正式なコンセッションを取得したケースが1例だけ確認できた。ンペル村のNMである。1944年生まれのNMはモブツ政権期には当時の唯一政党「革命人民運動」(Mouvement Populaire de la Révolution: MPR)の党官僚を務め、またボロボの町で役所に勤務した。1997年に正式な手続きを経てコンセッションを取得し、畜産を営んでいる。聞き取りによれば、現在500haの牧場で1万2000~1万3000頭のウシを飼育しており、チュンビリの港から船でキンシャサ向けに出荷するという。NMの事例は、この国における企業家の出自を考えるうえで示唆的である。

5. 土地利用

調査地域でボロボの生息が確認されて以降、その保護に国際社会の関心が向き、自然保護に関わる外部資金が流入するようになった。主要な外部ドナーの一つであるWWFは、この地域で参加型地図作製(participatory mapping)事業を実施している。これは地域住民の参加を得て、居住地域の土地利用図を作成する事業である。土地利用の現状を把握するとともに、効率的な土地利用と森林保護につなげる目的がある。地図作製は現

きていないため、Koy Kondjo et Onotamba Kondjo (2011)の記述に従い、SEBO社としておく。

³⁵ 畜産会社に雇用される住民も少なくなく、住民が畜産会社に対して強い反感を募らせているという状況には見えない。しかし、植民地期におそらくは半強制的に接収されたと思われる牧場の領域は広大であるし、牧場のウシが住民の畑を荒らすこともある。会社側は、住民の怒りを買わぬよう配慮していると言えよう。

³⁶ 2015年9月12日エンビリマ村にて聞き取り。

在進行中であり、バテケ＝ノール・チーフダム北部、ンベ＝ンクル・グループマンに含まれる十数の土地区画 (terroir) についてデータが整備されつつある。ここで地図作成の基本単位となっているのは、特定のランドチーフに帰属する領域である。この参加型地図作成事業は、先述した 2002 年森林法を根拠としてローカル・コミュニティによる森林コンセッション保持を進めることを念頭に置いている。ランドチーフが権利を持つ領域には、居住地の移動などにより、権利保持者の居住地が存在しないこともしばしばある。つまり、この領域はロカリテと重なることもあるが、重ならないこともある。以上を鑑みて、この領域を指す terroir の訳語を「土地区画」とする。2015 年の調査時、WWF のギィ・チマンガ (Guy Tshimanga) 氏らの厚意により、データの一部を得ることができた。バテケ＝ノール・チーフダム全体の中での位置づけが十分明らかでないという限界があるが、複数の村落における土地利用の実態が示されている点で貴重である。以下では、そのデータを分析し、土地利用の特徴をまとめておく。

表 1 は、Koy Kondjo et Onotamba Kondjo (2011) に示される 9 つの土地区画のデータを整理したものである。総面積 4 万 5079ha は、居住地を除けば、森林とサバンナに区分される。森林の利用として読み取れるのは、1) そのまま住民の自由な利用に任せる、2) 農地とする、3) ボノボ保護林にする、4) 森林伐採会社に利用させる、という 4 つの方向性である。利用パターンは土地区画ごとに大きく異なり、居住地がある場合は農地面積の割合が大きく、住民が自由に利用できる森林面積の割合が小さいことがわかる。つまり、住民は住居近くの森を開墾、火入れして農地に変えているわけである。また 9 つのうち 1 つの土地区画であるマカア (Makaa) では、ボノボ保護林が設置されると同時に、森林伐採会社にコンセッションが与えられている。

表 1 においてサバンナは、放牧用地として示されている。参加型地図作成事業では、土地区画に権利を有する住民の参加を得て利用図を作成する。したがって、この表が示すのは、SEBO の放牧地として利用されていないサバンナはすべて、住民が自分たちの放牧地として認識しているということである。SEBO が占拠する面積はこの土地区画全体の 19% に達するので、その大きさに驚かされるが、一方で住民がサバンナは基本的に放牧地だと認識している事実にも驚かされる。サバンナの放牧地としての利用は住民の間に急速に広まりつつあると考えるべきだろう。

表 2 は、調査地域のロカリテを含む土地区画の利用を示している。表 1 とは土地利用の区分方法が異なり、サバンナはすべて放牧地と認識されている。表 2 の土地区画のうちエンビリマ、ンカラ、ンペルでは聞き取りを実施したが、実際にサバンナがすべて放牧地として囲い込まれているとは思えない。しかし、住民による囲い込みは既に始まっており、ことに港町のチュンビリに相対的に近いエンビリマでは、同ロカリテには土地が足りないため、他の地域のランドチーフに頼んで放牧地を得たとの意見が聞かれた。

また、ンカラやンペルではボノボ保護林の割合が大きく、熱心にボノボの保護に取り組んでいることがわかる。一方、特にンカラでは農地の割合も大きく、焼き畑による森林の農地への転換が続くとボノボ保護にも影響が出るのが懸念される。

おわりに

本稿では、DRC 西部における予備的調査の覚書として、調査地の地理的、社会的条件、特に土地利用の性格について整理した。最後に、明らかになった点をまとめておこう。

コンゴ盆地から大西洋岸に至る地域は総じて人口希薄だが、この地域も同様であり、現在もなお土地不足は顕在化していない。人々は焼き畑農業に依存しており、森林を伐採開墾して自給用耕作地を拓いている。住民の多くはバテケ人であり、土地をはじめとする天然資源管理はバテケ社会の規範によって管理されている。その点で、現地社会は国家に対してかなりの程度自律的である。ただし、もともとヨーロッパ資本の畜産企業が存在し、植民地期以降国家が所有権を保障する形で現在でも広大な土地を利用している。DRC では長期にわたり政治的混乱が続いたこともあって、土地に対する政策的介入はそれほど行われていない。それでも 2000 年代に入ってコミュニティによる森林コンセッション所有を認める法律が制定されるなど、介入に向けた準備が始まりつつある。こうしたなか、調査村ではボノボの発見を契機として NGO を介した開発資金の導入が開始されている。外部からの資金流入が始まる一方、住民によるサバンナの囲い込みという現象が起こっている。人口希薄、国家からの自律性の強さ、そして土地に対する政策介入の乏しさ、といったこの地域の特徴からは、変化の動因がそれほど強くないと予想される。しかし実際には、土地に対する認識や土地利用の実践において大きな変化が観察された。

謝辞：本稿執筆にあたっては、JSPS 科研費 25101004 の助成を受けた。記して謝意を表する。

参考文献

【日本語文献】

- 武内進一 2014. 「コンゴ民主共和国の土地関連法制」 武内進一編『アフリカの土地と国家に関する中間成果報告』アジア経済研究所 177-217.
——— 2015. 「コンゴ民主共和国、ルワンダ、ブルンジの土地政策史」 武内進一編『ア

フリカ土地政策史』アジア経済研究所 171-196.

【外国語文献】

- Dupré, Marie-Claude et Bruno Pinçon 1997. *Métallurgie et politique en Afrique centrale: Deux mille ans de vestiges sur les plateaux batéké, Gabon, Congo, Zaïre*, Paris: Karthala.
- Ghys, J. 1934. “Etude agricole de la région Bateke-Batende-Baboma,” *Bulletin agricole du Congo belge*, 25(1): 114-127.
- Koy Kondjo, Héritier et Patrick Onotamba Kondjo (Sous la supervision de Bruno Pérodeau) 2011. *Cartographie des terroirs communautaires dans la Chefferie Bateke Nord (Territoire de Bolobo / Province du Bandundu)*, Kinshasa: WWF.
- Ministère de l’Enseignement supérieur, universitaire et de la recherche scientifique, 2014. *Province de Bandundu*, Institut Géographique du Congo.
- Narat, V., F. Pennec, L. Ledo-Bisson, JC Bokika Ngawolo, R. Dumez and S. Krief 2015. “Bonobo Conservation as a Means for Local Development: An Innovative Local Initiative of Community-based Conservation in the Democratic Republic of the Congo,” *Primateology*, 4: 127.
- Sautter, Gilles 1966. *De l’Atlantique au fleuve Congo: Une géographie du sous-peuplement, République du Congo, République Gabonaise*, (volume I et II), Paris: Ecole Pratique des Hautes Etudes.
- Takeuchi, Shinichi and Jean Marara 2009. “Conflict and Land Tenure in Rwanda,” *Working Paper No.1*, JICA Research Institute.
- 2011. “Features of Land Conflicts in Post Civil War Rwanda,” *African Study Monographs, Supplementary Issue, No.42*, pp.119-135.
- 2014. “Land Tenure Security in Post-conflict Rwanda”, In *Confronting Land and Property Problems for Peace*, ed. Shinichi Takeuchi, Oxon: Routledge, pp. 86-108.
- Vansina, Jan 1973. *Tio Kingdom of the Middle Congo: 1880-1892*, London: Oxford University Press.

【統計資料】

World Development Indicators

(<http://databank.worldbank.org/data/reports.aspx?source=world-development-indicators>)

表1 バテケ=ノール・チーフダム内村落の土地利用(その1)

土地区画(Terroir)名	Makaa	Engoli	Mpoyo	Mobeya	Tsalu	Embuma	Engunu	Messeon	Eyia	Ensiemu	合計
面積 (ha)	9,871	2,218	6,743		3,895	4,067	9,974	4,915	2,704	692	45,079
住民利用向け森林 (%)	4.2%	65.9%	26.9%		60.8%	8.6%	25.7%	20.0%	49.4%	56.5%	25.9%
ボノボ保護林 (%)	11.9%	0.0%	0.0%		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.6%
SEBO放牧用地 (%)	41.4%	24.0%	0.0%		35.0%	21.6%	17.2%	0.0%	0.0%	0.0%	19.0%
住民向け放牧用地 (%)	16.5%	10.1%	39.8%		4.1%	24.8%	57.2%	24.5%	46.7%	11.4%	31.0%
森林伐採会社(SEBA)用地 (%)	26.1%	0.0%	0.0%		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.7%
農地 (%)	0.0%	0.0%	32.6%		0.0%	44.3%	0.0%	52.9%	3.8%	32.1%	15.4%
居住地 (%)	0.0%	0.0%	0.6%		0.0%	0.8%	0.0%	2.7%	0.0%	0.0%	0.4%

(出所) Koy Kondjo et Onotamba Kondjo (2011)のデータから筆者作成。

表2 バテケ=ノール・チーフダム内村落の土地利用(その2)

土地区画(Terroir)名	Nkoo	Nkuru	Bodzuna	Embilima	Mpelu	Nkala	合計
面積 (ha)	24,850	23,164	9,436	13,564	10,412	7,651	89,077
森林 (%)	48.2%	51.1%	24.5%	61.1%	30.9%	21.6%	44.1%
ボノボ保護林 (%)	1.8%	4.6%	21.9%	0.0%	25.1%	21.4%	8.8%
放牧地 (%)	45.6%	37.0%	49.3%	31.1%	41.9%	46.2%	41.2%
農地 (%)	4.2%	6.9%	4.1%	6.8%	1.8%	10.4%	5.5%
居住地 (%)	0.3%	0.4%	0.3%	1.0%	0.3%	0.3%	0.4%

(出所) WWFデータから筆者作成。